

# 四季の写真

“風景”から“スナップ”まで

秋  
2007

〈特別定価〉

980円

あなたにしか  
撮れない  
一枚のために

福山雅治

〈特集〉

## 空気の写し方

ハービー・山口 / 瀧本幹也 / 竹村幸和

とじ込み付録 1

ハービー・山口  
オリジナルプリント

とじ込み付録 2

四季の写真 特製  
「オクル写真立て」

RENEWAL SPECIAL

# あなたにしか撮れない一枚のために。

『四季の写真』リニューアルにあたって。

ここに、新しくなった『四季の写真』をお届けします。

デジタル一眼レフからコンパクトデジタルカメラ、さらに携帯電話付属のデジカメなどを使って、いまや多くの方が、気軽に自由に写真を撮っています。

ちょっとした記録として、親しい人との思い出として、感動を伝える作品として、ときには、時代を鋭く抉るメッセージとして。

写真は、世界のその場所、その瞬間だけに現れる、決して言葉では説明することができない、「何か」を表現してくれます。

進化し続けるカメラやネットワークによって、わたしたちは、もともと写真が秘めていた、いや、もともと世界に秘められていた「何か」を発見する喜びを、より手軽に手に入れ、共有できるようになったはずです。

これまでの『四季の写真』は、美しい日本の自然や風景に出会った感動を、写真作品として結晶化することにこだわり続けてきました。しかし、変化を続ける時代の中で、わたしたちは、その使命をさらに広げたいと考えました。世界に秘められているはずの「何か」を発見する。その喜びを、写真を趣味とするすべての方々と共有したい。

生まれ変わった『四季の写真』のコンセプトは、

「あなたにしか撮れない一枚のために」。

忌憚なきご意見、ご批判をいただければ幸いです。また、叶うならば、今号を存分にお楽しみいただき、末永く本誌をご愛読いただけるようお願い申し上げます。

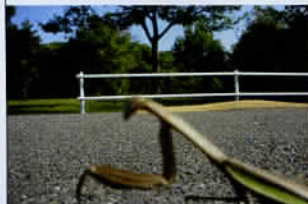
新『四季の写真』編集部一同



「表紙撮影」ハービー・山口  
「表紙モデル」藤井キヨ（90歳）  
菊地智子（孫娘・24歳）  
智子さんは高校時代から写真学校に通い、会社勤めを経て、ブライダルカメラマンのアシスタントに。その後、イタリア・フィレンツェのコイネ校で写真を学ぶ。帰国後、コンペの応募やグループ展で活動し、イタリア時代に撮影した作品を集め、写真集『ある街にて』（新風舎刊）を出版。現在、再びイタリアに渡るべく作品を制作中。キヨさんは元気に一人暮らし。近所に住む智子さんが面倒を見ている。

COVER STORY

001



# Contents

004 『四季の写真』リニューアル Special Gallery  
福山雅治 Masaharu Fukuyama — 出逢いの記憶 —

## 011 特集◎空気の写し方

- 1. 半径1mの空気を写す。—人物— **ハービー・山口** Herbie Yamaguchi
- 2. 観光地の空気を写す。—光景— **瀧本幹也** Mikiya Takimoto
- 3. 夜の空気を写す。—風景— **竹村幸和** Yukikazu Takemura

046 Gallery Walk◎アート・フォト・サイト・ギャラリー **安珠** Anju

047 読者参加企画◎〈半径10mのフォトコンペ〉 **東京タワーです。**

## 054 そこにある季節

- ◎近所論 **大西みつぐ** Mitsugu Ohnishi
- ◎宝探し **米美知子** Michiko Yone
- ◎東京……故郷のにおいを探して **アラキミキ** Miki Araki

072 ニッポンの地元写真 **赤星豊/染川香**

074 八木史子のカメラ日記 in 山形 飛鳥  
カメラ3台ぶら下げて、豊橋の娘、飛鳥に渡る。

107 だって、デジタルなんだから。この一枚、あなたならどう料理する？

110 “女子にもオススメ” 撮って楽しい! クラシックなカメラ

112 Pictures of Kanana「ゴミ箱」で感じるお国から **竹内海南江** Kanae Takeuchi

114 歳月 1992~2007

084 もの、こと。  
NEWS & NEWS

088 見る、安らぐ。  
Photo Exhibitions Information

090 撮る、見せる。  
Let's Try PHOTO CONTEST

092 見る、読む。  
BOOKS INFORMATION

094 ◎写真が語る昭和  
昭和30年代 銀座界限 島和也

096 四季の写真 リニューアル記念  
読者モニター 大募集

099 「四季ふぉとギャラリー」開設します。

100 「四季の写真 フォトコンテスト」結果発表

106 「あなたにしか撮れない一枚」募集します。  
「四季ふぉとギャラリー」作品応募要項

〈特別とじ込み付録①〉ハービー・山口 オリジナルプリント

〈特別とじ込み付録②〉四季の写真 特製「オクル写真立て」

# 四季の写真

2007 AUTUMN

>> 四季の写真 リニューアル記念 読者モニター大募集 → くわしくは本誌96ページにて

『四季の写真』リニューアルを記念し、高性能のデジタル一眼レフ、ペンタックス K10D、ソニーα100、画像管理&レタッチソフトのアドビフォトショップ ライトルームのモニター企画を行います。いずれも「写真」を楽しく撮る、創るときに欠かせないアイテムです。本誌 96 ページをご覧ください。



★ ペンタックス K10D



★ ソニーα100



★ アドビフォトショップ ライトルーム



portrait

半径1mの空気を写す。—人物— p.12



sightseeing

観光地の空気を写す。—光景— p.24



scenery

夜の空気を写す。—風景— p.36

特集

# 空気の写し方

カメラによって切り取られた四角い世界。

その四角い空間には、見えるはずのない空気がいつも漂っている。

大自然、観光地、そして街の中の写真にさえ……。

そこに写る空気こそが、写真に命を与える。



半径 1 m の空気を写す。

— 人物 —

ハービー・山口

1 portrait  
Herbie Yamaguchi





P.13 ライカMP スミクロン35ミリF2 絞りF5.6 1/125秒 ネオパン400プレスト

P.12 ライカM3 スミクロン50ミリF2 絞りF4 1/250秒 ネオパン400プレスト

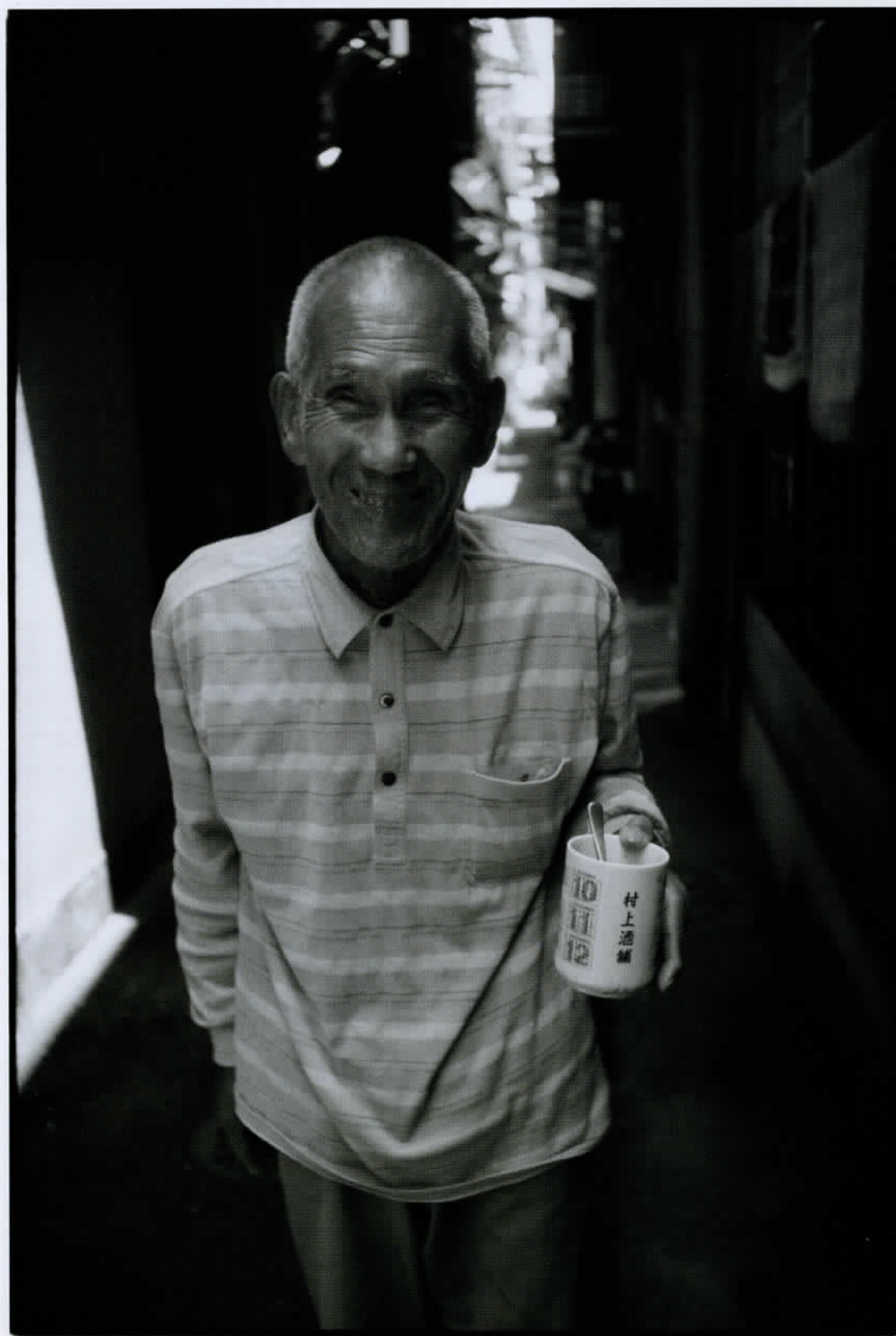


ライカM3 ズミクロン50ミリF2 絞りF2.8 1/30秒 ネオパン400プレスト



ライカM3 ズマール50ミリF2 絞りF2.8 1/60秒 ネオパン400プレスト





ライカMP エルマー35ミリF3.5 絞りF4 1/30秒 ネオパン400プレスト



〈撮影データ〉ライカM3 スミルックス50ミリF1.4 絞りF1.4 1/30秒 ネオパン400プレスト



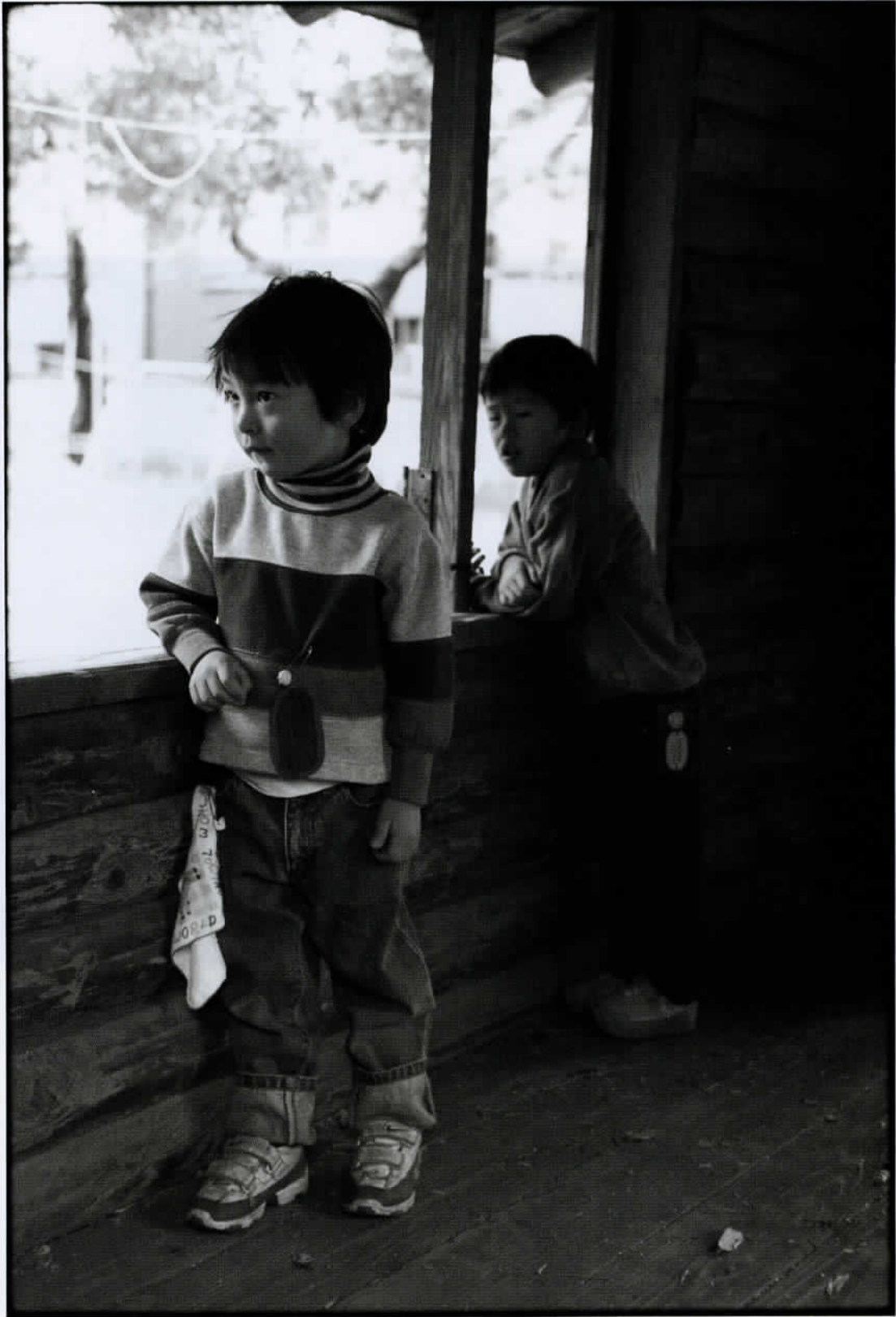
ニコンF100 Aiニッコール28ミリF2.8 絞りF5.6 1/60秒 ネオパン400プレスト



ライカMP エルマー-35ミリF3.5 絞リF3.5 1/30秒 ネオパン400プレスト



ライカM3 ズミクロン50ミリF2 絞りF4 1/60秒 ネオパン400プレスト



ライカM6 スミクロン50ミリF2 絞りF2.8 1/60秒 プロト-MAX400



ライカM3 スミルックス50ミリF1.4 絞りF2.8 1/60秒 プロト-MAX100

## 東

京に暮らす若者たちを撮った写真集『P E A C E』。若者たちの気取らない笑顔を眺めているだけで、平和な気持ちになってくる。ある評論家が「ハービー・山口はいと

も簡単に若者の世界に入り込み、呼吸するように彼らの表情を掬い取る」と評したというが、実際はどのようなアプローチをするのだろうか？

「まずは声をかけます。『代官山ってステキなところですね』とか軽く会話する感じ。断られることもありますが、平和に見えるカッパルでも、実は禁じられた恋の最中ってこともあるし、警戒心の強い人だっている。だから深追いはしません。頼んでいるのに無視されたり、無碍に断られるとヘコむけど仕方ない。写真を撮るといふ行為は難しいものです」

ハービー・山口さんの愛機はライカ。大切そうに首から下げ、いつでもどこでも一緒にいる相棒だ。

「デジカメだと半年前の機種は古くなってしまっけど、ライカは永遠に朽ち果てない。今使っているレンズは70年以上前のも

の。歴史のロマンを感じながら現代の被写体を映す。ライカは写真を撮ることのモチベーションを高めてくれる」

### 貧乏がくれたシャッターチャンス

ハービーさんは市井の人を撮ったモノクロームのほかに、日本や海外のミュージシャンの撮影でも高い評価を得ている。とりわけ70年代のイギリスでクラッシュなどパンクムーブメントを代表するミュージシャンを数多く撮り、名を馳せた。

「今考えればすごい面々ですが、ボーイ・ジョージは僕のルームメイトだったし、付き合っていた女の子がセックス・ピストルズのメンバーの元彼女だったり、ほかのミュージシャンも友だちの友だちだったり、狙って撮ったわけじゃない。僕にとっでは半径5mで起きたハプニングを撮ったに過ぎないんです」

運を引き寄せるのもまた才能というが、なんとこの幸運だ。「貧乏ゆえに神様が与えてくれたシャッターチャンスだったのかもしれない。とにかく貧しくて1日に1食しか食べられなかったし、道路に落ちてる木屑



すべての美しさをたたえた瞳。  
いつも僕は、それを探している。

インタビュー◎ ハービー・山口さん

# 1

を拾って、暖炉にくべる薪代わりにしたこともありましたが、ただハートだけは純粹だったんだね。ミュージシャン撮って有名になりたいとか、金持ちになりたいという欲はまったくなかった」

### 一人ぼっちの子ども時代

子ども時代は、カリエスという病気のため、体を動かすこともままならない日々が多かった。「体育はいつも見学。運動ができないことで同級生や先生からも散々いじめられました。遠足や修学旅行で班分けをするとき、僕を受け入れてくれる仲間はいない。孤独と絶望のなかで生きていましたね」と回顧する。

中学入学と同時に好きな音楽をやろうとブラスバンド部に入部。そこでフルートを手にしてから、初めて大きな夢と仲間ができて、ハービーさんにやっと

笑顔が戻ってきた。

「ところが、低血圧とか腰痛で3ヵ月ほどでブラスバンド部を離れるんです。やっと手に入れた夢と仲間が、退部したとたん、消えてなくなりました」

すべての自信をなくし、何ヵ月も引きこもりを経験するはめになったのもこのころだ。

なんとか中学2年に進んだら、写真部に入らないかと誘ってきた生徒がいた。誘われるまま撮り始めた写真だが、「これは僕に合っているかもしれない」と直感。その可能性にはまった彼に、将来写真家になろうという意欲が芽生えた。

写真部に属しながら、バンドでも活動した。ジャズフルートのハービー・マンにあこがれてフルートを吹く彼のことを、バンド仲間は「ハービー」と呼んだそうだ。そんなとき、「病気も治ってきたし、コルセットも

外せそうだ」と医者からのうれしい知らせがあった。

「よし病気が治ったら、健康で人から愛され笑顔と夢のある人間に生まれ変わるぞ!」

その願いをこめて彼は、ハービー・山口と名乗り、第2の人生を生きようと誓ったそうだ。

### 瞳に魅せられたあのとき

目標は定まったが、方法論はわからなかったハービーさんに転機となるような瞬間が訪れる。「20歳のころ、近所の公園でバレーボールをしている女の子を写していたんです。そうしたらトスし損ねたボールが僕のほうへ飛んできて当たりそうになった。『ごめんなさい。大丈夫ですか?』心配して飛んできた女の子のまなざしに僕は釘付けになりました。思いやり、優しさ、

慈しみ……人間の持ちうるすべての美しさをたたえたその瞳こそ僕が撮りたいものなんだとその時、気づいたんです」

報道写真を撮って平和を訴える方法があるように、美しいものを撮って平和を伝える方法もあるとハービーさんは言う。

「子ども時代のつらい体験があったから女の子の瞳の奥にあるやさしさに気づいたのかもしれない。人が人を好きになり、世の中が平和になるように僕の写真が役に立てたら本望です」

代官山の歩道で、ロンドンの街角で、ハービーさんは今日もその瞳を追いかけて、シャッターを切り続けている。

(文・飯島裕子)

僕の写真を見て心が平和になれるなら、僕はそれだけでハッピーになれる。



ハービー・山口(ハービー・やまくち)

1950年、東京生まれ。73年に大学卒業後渡英。ロンドンに約10年間を過ごす。ロンドン在住時代に撮ったロックミュージシャンは高い評価を受ける。帰国後もアーティストからちまたの人々までを、気取らない優しい表現のモノクロ作品で次々に発表。それは多くの写真集、写真展で紹介されている。またラジオのDJ、テレビの音楽番組『Music Tide』など、写真家のジャンルを超えて幅広く活動中だ。http://www.herbie-yamaguchi.com/ (撮影/桃井一至)



「ライカで歴史のロマンを感じながら現代を撮ります」

左がライカMP+ズミクロン35ミリF2。右がライカM3+ズミクロン50ミリF2。





観光地の空気を写す。

— 光景 —

瀧本幹也



# 2

sightseeing  
Mikiya Takimoto









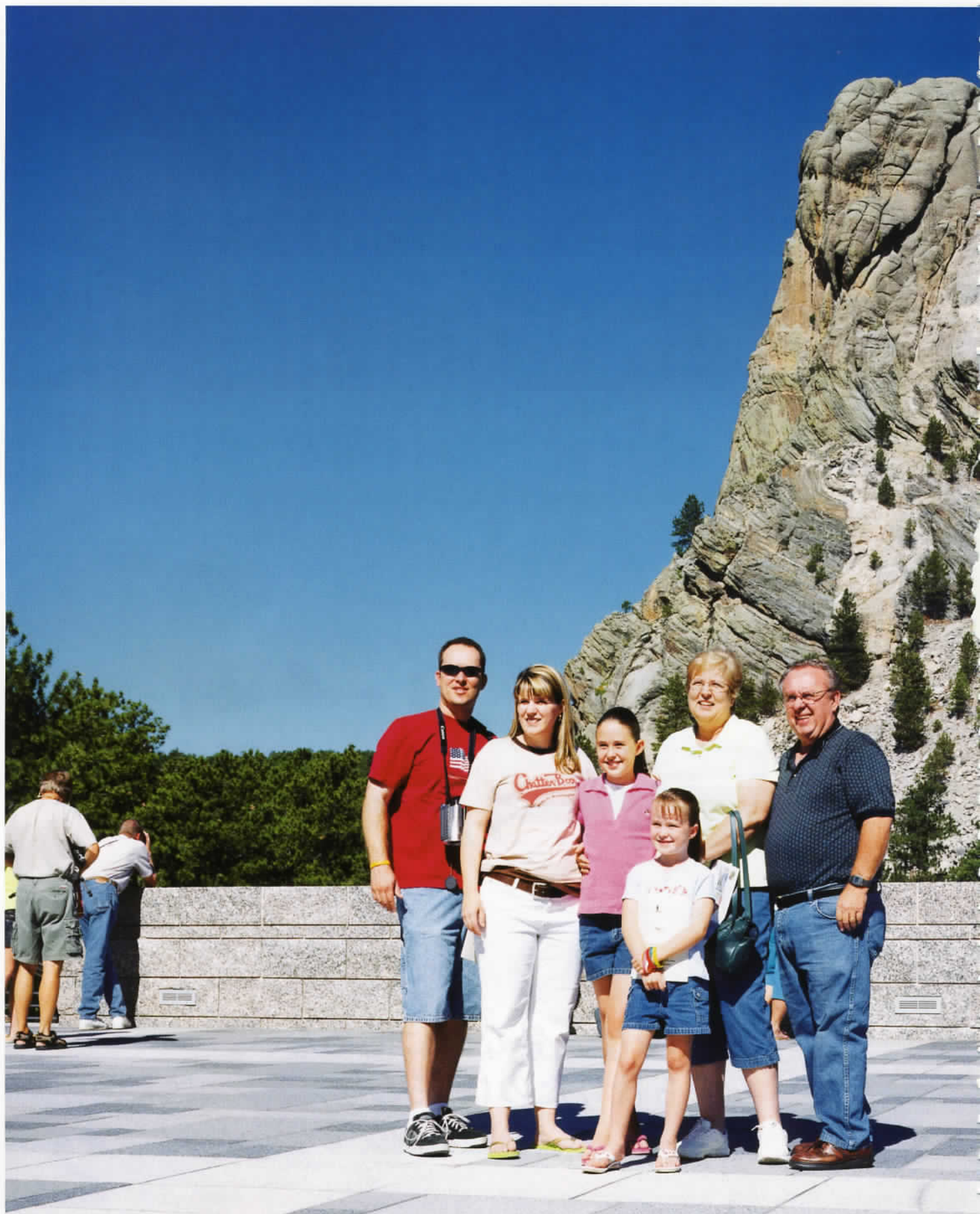








P.24~34共通  
写真集「SIGHTSEEING」より / リンホフ マスターテシニカ  
トヨビュー45CF 90ミリ、120ミリ(ニッコール)、150ミリ、210  
ミリ(ローデンシュトゥック) 絞りF22~45 1/15~1/125秒  
フジカラー160NC



## 釣

り糸をたらし、静かにジーツと待ち続ける。あえてたとえるなら、こんな写真の撮り方だ。

つまり、『SIGHTSEEING』の撮影では、シノゴと呼ばれる大判フィルム（4×5インチ判）のカメラを三脚にセット。構図を決めたら、そこに飛び込んでくる観光客をひたすら待ったという。ときには3〜4時間（！）も粘ったとか。「演出はしていません。たしかに『こんな観光客が入ってくれたらなあ』といった期待は抱きますけど、けっこう行き当たりばったり。自分自身が自由な発想でいられると、なにかしら発見があったり、嘘みたいな偶然が重なって、こちらの予想を上回る写真が撮れるんです」

ある意味、ドキュメンタリー写真……だ。それにしても、瀧本さんの観光写真、もとい観光客の写真は不思議な空気に満ち溢れている。一見なんの変哲もない観光地なのに、じつくり見ると観光客のしぐさやたたずまいに思わず笑みがこぼれる。そもそも、失礼ながら、なぜこんな奇妙な雰囲気のある作品を撮

りはじめたのだろうか？

「あちこちの有名観光地を訪れているうち、ある共通点に気づかされました。まず、どこも大手ハンバーガーショップがあったりして、アメリカナイズされていること。もう一つは、エジプトのピラミッドにしろ、インドのタージマハールにしろ、それらはまぎれもない本物なのに、観光客の存在によって、まるで薄っぺらなジオラマのように思えてきてしまう、ってことです」「なぜなら」と、目を丸く輝かせて言葉をつなぐ。「例えば、はるばる遠くまできたのに、記念写真に夢中になったり、隣接するリゾートホテルのプールで泳いだり、ときには卓球とかしているわけですよ（笑）。そんな感じで、単純に観光客をモチーフにしたら面白い作品群が撮れるかなあ、と思ったのがきっかけ。しかも、それらは現実じゃないですか」

### 大判カメラの謎の東洋人

ここで、一つの疑問がわく。大きなカメラの横に、なにかを待ち続ける東洋人、となれば、相当に怪しい絵柄では……。



ヘンな光景なのに憎めない。  
待ち続けたのは、そんなシーン。

インタビュー◎ 瀧本幹也さん

# 2.

「意外と大丈夫でしたよ(笑)。  
基本的には『この人たちだ!』っ  
てタイミングまでカメラには黒  
布をかぶせておきましたから」

なるほど、観光地だからこそ、  
いろいろな国から多くの観光客  
が集まるわけで、逆に目立たな  
いのかも。現地の写真業者とま  
ちがえられることもあった。

「むしろそのほうがいい。まあ、  
さすがにアメリカのホワイトハ  
ウス前ではちよつと警戒されま  
した。あと、リオのカニバル  
では、取材の申し込みをして狂  
喜乱舞の中で撮らせてもらった  
のですが、大判カメラで撮影を  
している謎の東洋人がいるって  
ことで、現地メディアに逆取材  
された(笑)」

なぜ、35ミリ判一眼レフカメ  
ラを選ばなかったのか? 撮影  
も移動もずつとラクなはず。  
「35ミリフィルムとかだと、ど  
うしてもスナップになってしま

うかなあ、と。観光地の書き割  
りっぽさと、いわば、その舞台  
に集う観光客を細密にきっちり  
と描くには、やっぱり大判ワイ  
ルムカメラだと思っただけです」

撮影では、わざと暗めに撮っ  
て増感という手法で色を濃くし、  
コントラストも高めた。さらに  
原則として、天気の良い日に順  
光の光線状態で撮影した。これ  
らはすべて、観光地の嘘っぽさ  
をより強調するための、文法  
であるという。んー、なんとも  
明快。瀧本さん、実はかなり理  
論派のようだ。

「ホントかよ」と疑ってみる

ふだんは広告の最前線で活躍  
中の瀧本さん。広告撮影では、  
どう撮るかが事前に決まってい  
るパターンが多く、大勢のス  
タッフとのコラボレーション的  
な要素も強い。  
「観光地の撮影はまったく反対

で、予想外の形で結実すること  
が多く、完全に個人作業でした。  
ただ、被写体へのスタンスは両  
者にあんまり差とかななくて、広  
告の仕事をしているからこそ、  
こんな切り口で写せたともいえ  
るのかもしれない」

これはいったい、どういう意  
味なのか。たとえば、ちよつと  
シニカルな視点といったこと?  
「というか、作り手がしっかり  
としたポリシーを持たないとい  
けないかな、と。どんなときも、  
世の中の常識や多数決の意見と  
かをそのまま鵜呑みにするので  
はなく、『ホントかよ』と  
疑ったり、物事の本質はどこに  
あるのかと考えることですね」

こうした、思考のベクトル  
は幼少時代から  
備わっていたと  
いう。曰く、「か  
なり変わった子  
どもだったのは

たしか(笑)」

最後に、この観光地シリーズ  
は今後も続けるのか質問したら、  
「21カ国、それこそ南極まで行  
きましたから。次は別のモチー  
フに取り組みたい」と、あっさ  
り否定された。

「そういえば、温暖化で南極大  
陸の氷が崩落しているといわれ  
ているのに、目の前でゴォーと  
崩れるのを見て、観光客たちが  
『オー』とか歓声を上げている  
(笑)。写真を撮っていて、すご  
くシニカルでした」

なんだか自然体なのに、とん  
がっている。次の瀧本さんの作  
品が待ち切れなくなってきた!  
(文・金子嘉伸)

観光客のカラフルな服装。  
その色彩を。パキッと  
鮮やかに描いてみたかった。



瀧本幹也(たきもと・みきや)

1974年、名古屋市生まれ。写真家・藤井保氏  
に師事後、98年に独立。広告分野ほか、雑  
誌、映画ポスターなどで活躍中。受賞歴はニ  
ューヨークADC賞、カンヌ広告祭入賞ほか。写真  
集『SIGHTSEEING』も各方面から注目を集めてい  
る。10月2日よりAXISギャラリー(東京・六本木)  
にて『ゼラチンシルバーセッション展』が開催予定。  
(撮影/桃井一至)



はじめのころはリンホフのマスター  
デヒニカを愛用していたが、「少しで  
も機材を軽く」とトヨビューー45CFを  
使いはじめたという。



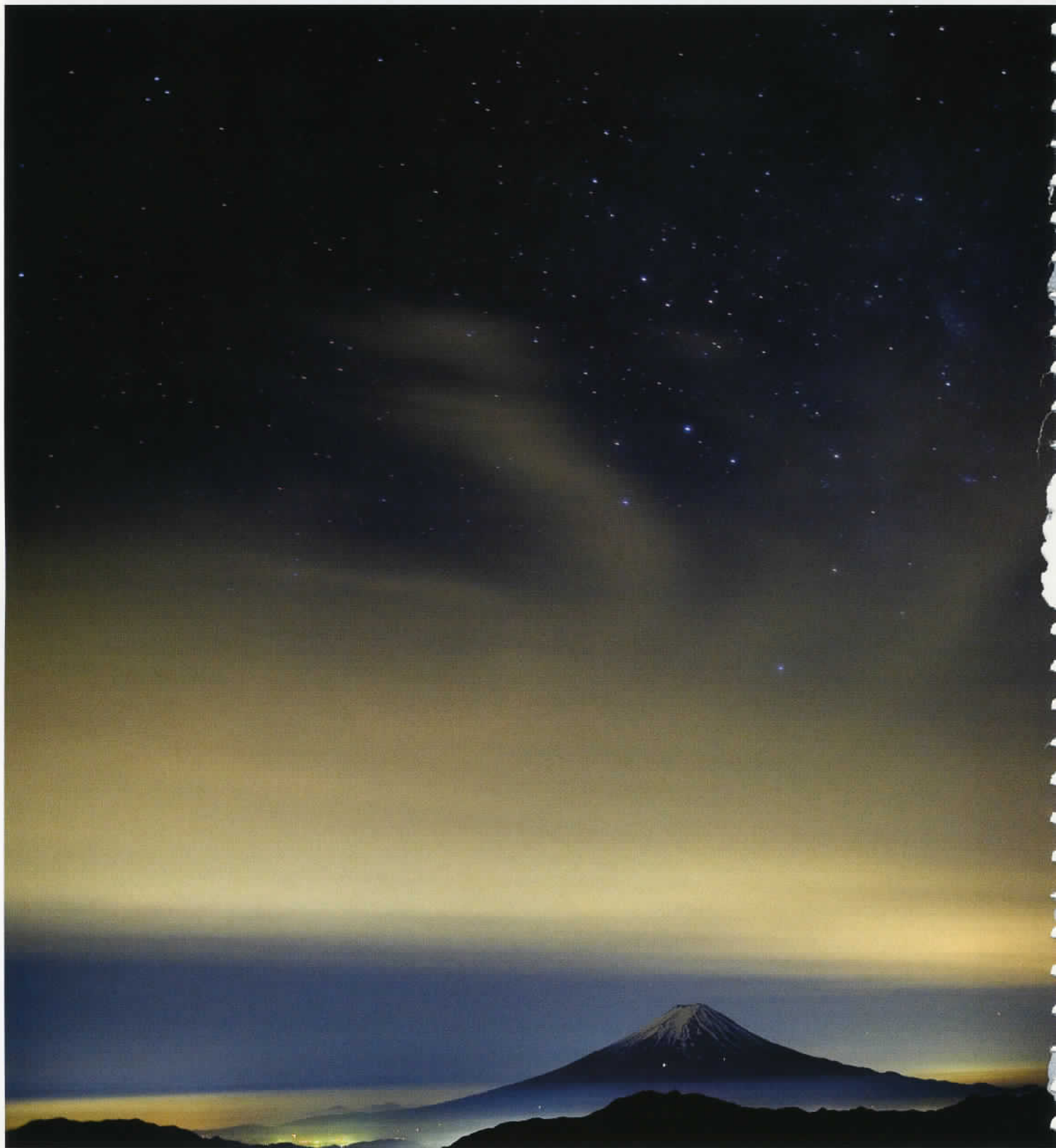
夜の空気を写す。

— 風景 —

竹村幸和

3 scenery  
Yukikazu Takemura

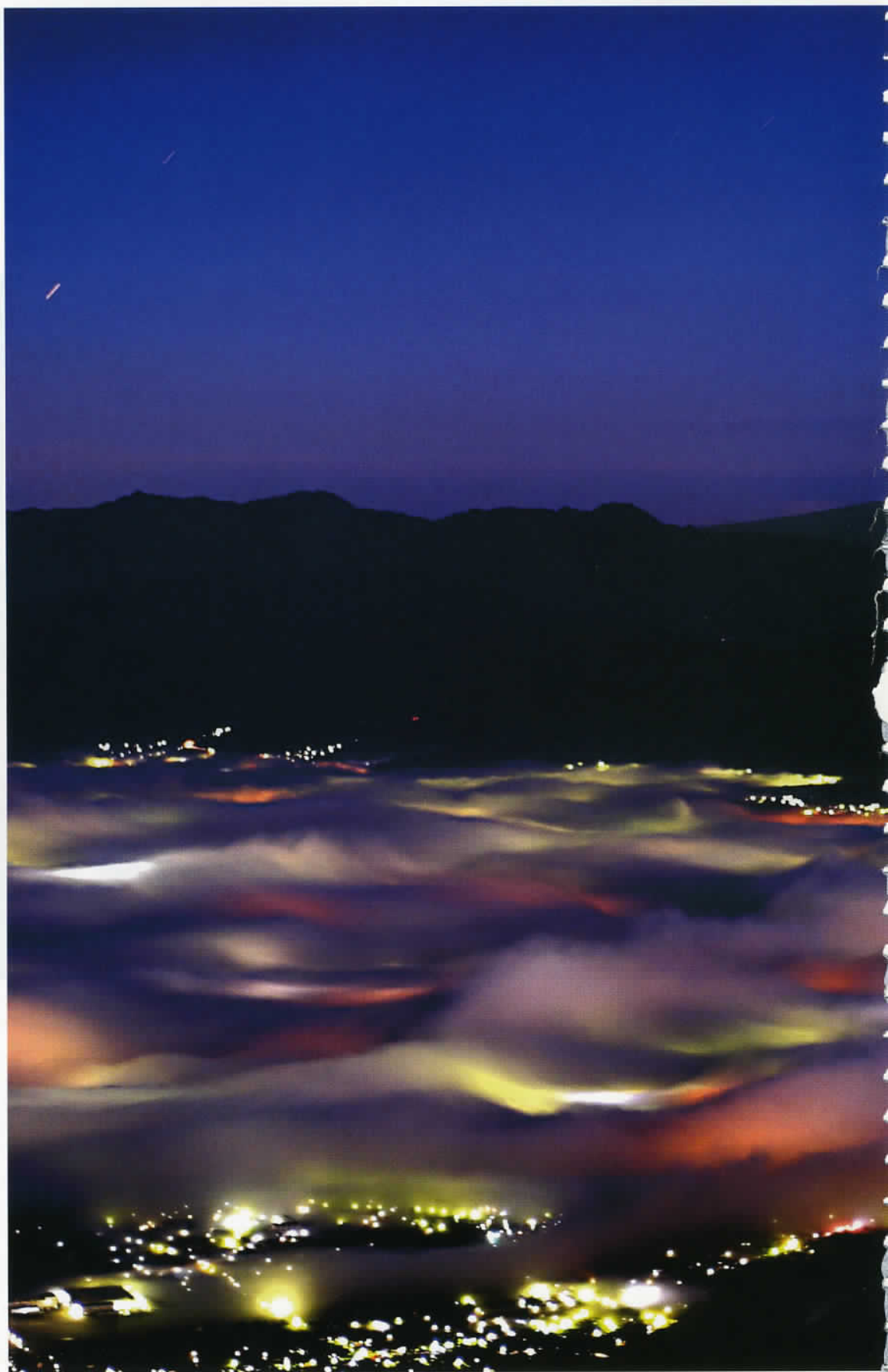




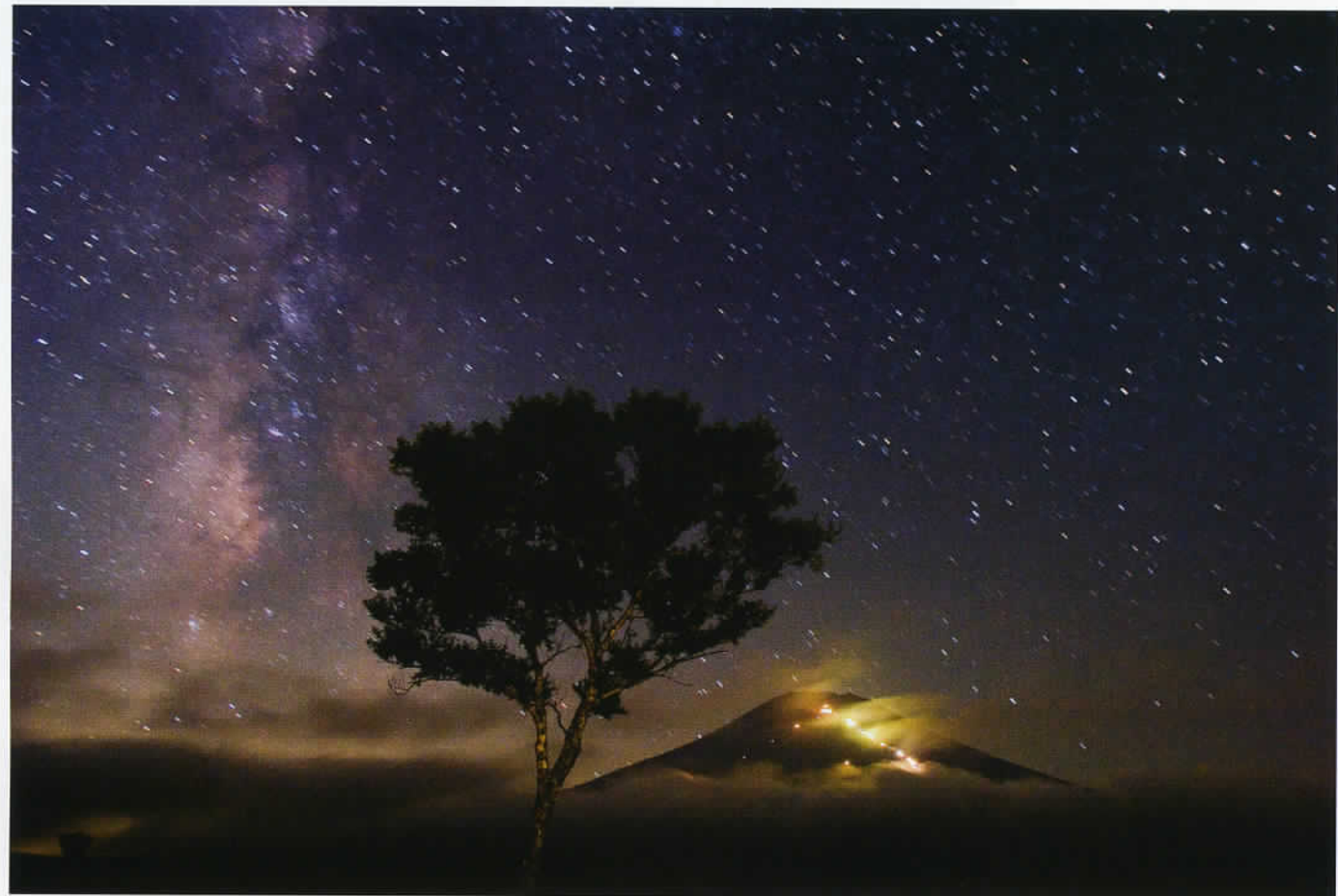
キヤノンEOS5D EF17~35mmF2.8 絞りF2.8 60秒 2007年6月・2時(白谷ヶ丸より)撮影 WBオート



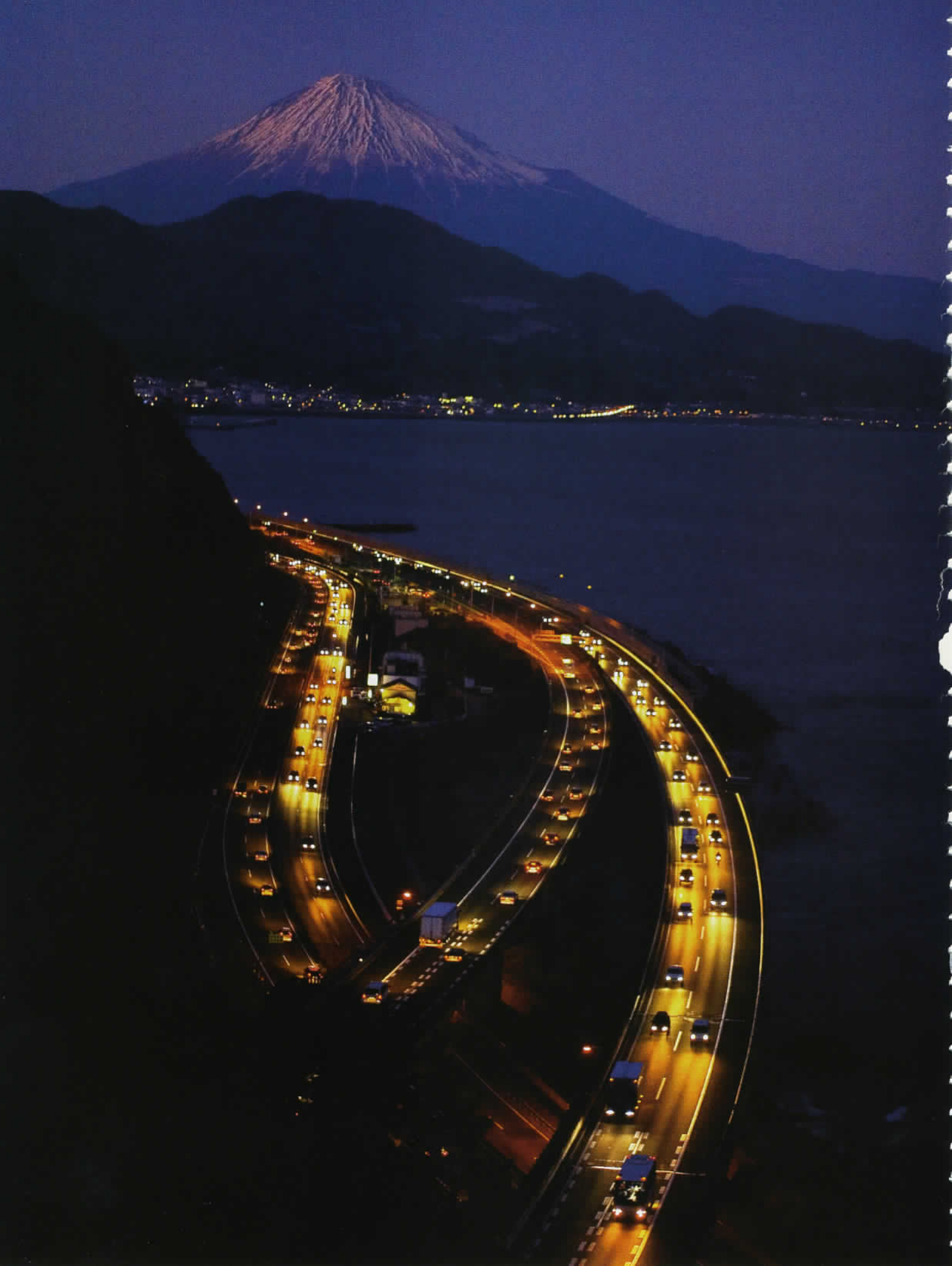
キヤノンEOS10D EF17~35ミリF2.8 絞りF2.8 5分 2003年10月・3時(甘利山より)撮影 WBオート

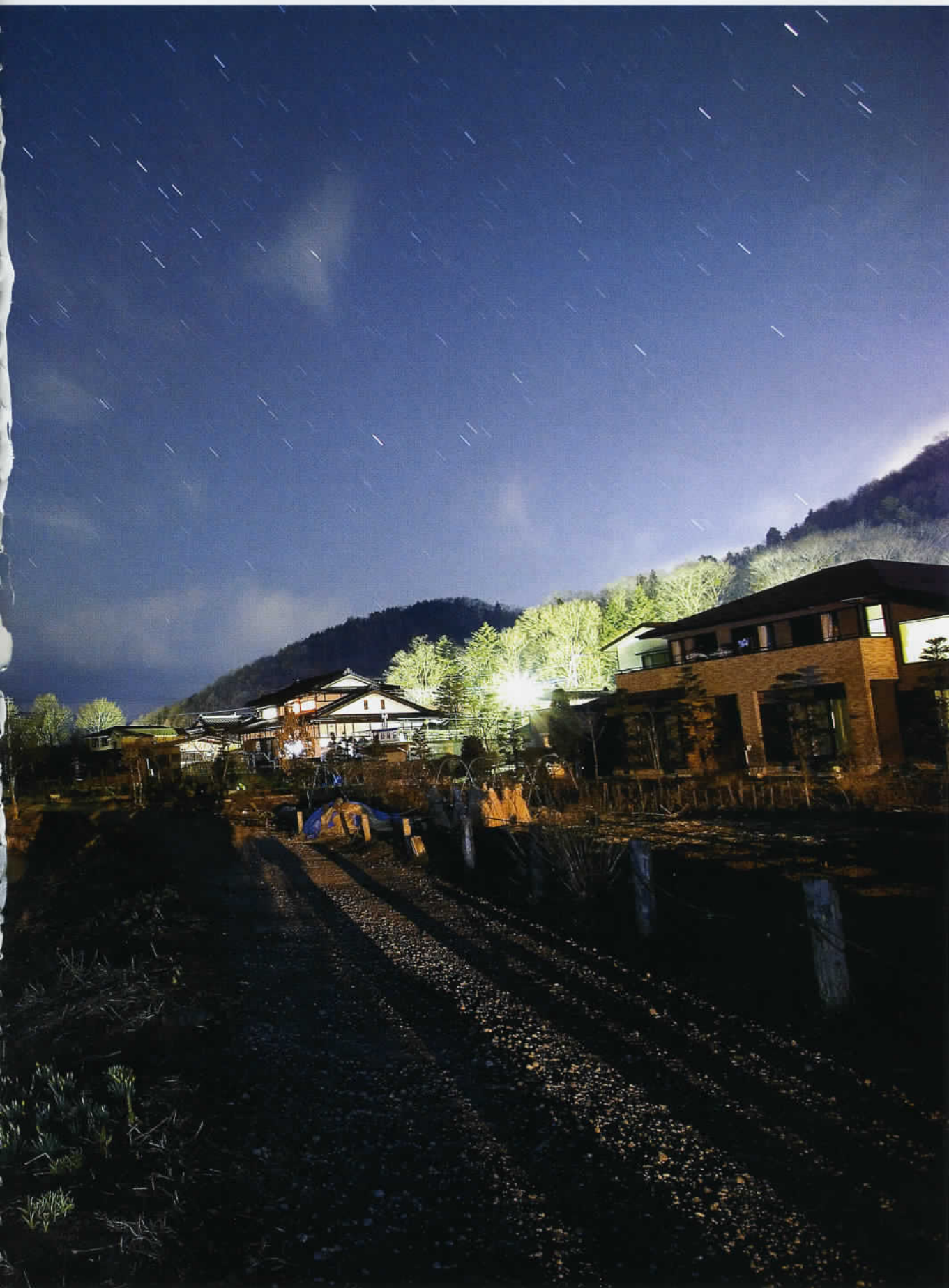




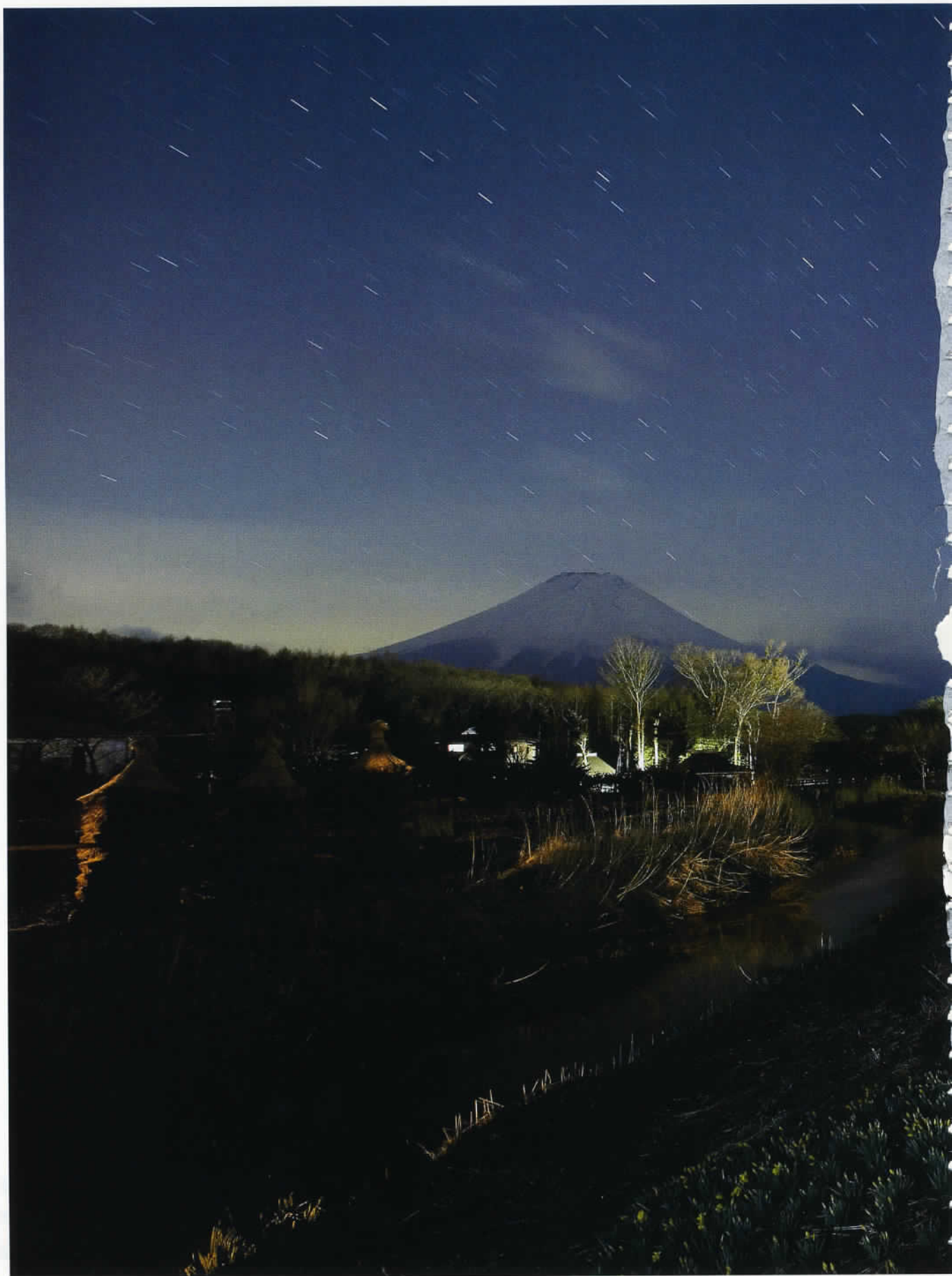


P.40 キヤノンEOS10D EF17~35ミリF2.8 絞リF2.8 8分 2005年7月・1時(梨ヶ原より)撮影 WBオート  
P.41 キヤノンEOS5D EF28~70ミリF2.8 絞リF2.8 1/60秒 2007年2月・18時(霧増峠より)撮影 WBオート





キヤノンEOS5D EF28-70mmF2.8 絞りF2.8 4分 2007年3月・1時(忍野より)撮影 WBオート



## 霧

が流れてきた。ここは神奈川県某所、小さな山上に位置する展望公園だ。気象条件さえよければ、はるか富士山を見通せるロケーション。が、しかし……。

「梅雨ですからね。ちょっと天候が回復したように見えても、なかなか思いどおりの姿を現してはくれません。先週の晴れ間にも撮影行へと出たのですが、結果は空振りに終わりました」

竹村さんは、もし富士山が望めたなら、その撮影のようすを取材させてもらう予定だったスタッフを気づかっただけ、どこことなく申し訳なさそうにいう。

それでいて、本人は内心、けっして落胆しているふうでもない。富士山の気難しきは百も承知。その話ができるだけで、自ずと気分が高揚してくる。あたかもそんな感じで、どちらかというマイペースといった面持ちだ。そもそも、竹村さんが、夜景富士を撮りはじめたのは、12年以上前のことだった。「富士にかかる笠雲をねらうつもりで、いわゆる有名撮影ポイントに向かったら、三脚を立てるスペースもないほど込んでいたのです。

で、夜間なら空いているだろうと思い、同じ場所にあらためて訪れたら、案の定、ほとんど独占状態でした（笑）」

聞けば、その昔、蒸気機関車をカメラで追い続けていた時代の光の独特な色彩に魅了されていました」というくらいだから、月明かりや星明かりの富士山のめり込んでしまったのも不思議ではないだろう。ましてや昼と違って、撮影の場所取りなどで嫌な思いをすることもなく、心おだやかに、ひとり富士山と向かい合える。

### 富士山と全身で向かい合う

竹村さんの夜景富士との、対話は、ふつう休み前の日没後からスタートする。

仕事から帰宅したら、はやる気持ちを抑え、慌てず、すばやく撮影の準備を整える。お供は、中判フィルムカメラのペンタタックス67Ⅱと、デジタル一眼レフカメラのキヤノンEOS5D。それぞれ広角から望遠までの各種交換レンズに、長時間露光でカメラをぶらさずにシャッターボタンを押すための三脚と



“夜の色”のグラデーションを  
ありのままに、すくい取りたい。

インタビュー◎竹村幸和さん

3

ケーブルレリーズ（リモコン）も忘れるわけにはいかない。夜食は、おにぎりや定番メニュー。ここで大切なのが、ライブカメラによる最終チェック。富士山の近くには何か所も設置されており、ほぼリアルタイムで現場のようすが静止画や動画で把握できる。富士山に向けられたカメラでは、雲のかけり方なども確認できる。

「複数のカメラを一望できるサイトもあります。ただ、実際は行ってみないとわからないことが多い。途中で天気も変わったりますし、雲の動きもけっこう速かったりしますから。あくまで目安として考えています」

クルマで移動できるポイントでは、あれこれイメージしながら撮影機材を選択する。2000m超の山に徒歩で登るときでも、カメラは最小限、フィルムとデジタルの両方をザックに入れる。

さすがに若いころから登山が好きだったとはいえ、必要以上の機材を携行しては、集中力も鈍ってしまう。富士山には、できるかぎりベストなコンディションで向き合うのが大前提だ。

撮影ポイントには、広範囲に及ぶ。富士五湖周辺はもちろんでいい。富士山はもろん、伊豆半島、アルプスから東京・横浜などの都市部まで、有名な撮影地はひと通り回っている。「ですが、八ヶ岳山系はガスがかかったりして、未だにうまく撮れません。4〜5回はチャレンジしているんですけどねえ」と、このときはばかりは、竹村さんも悔しそうな表情を隠さなかった。

### 贅沢な、贅沢すぎる愉しみ

ひとり山稜に立ち、ふと見上げれば、満天の星。眼下には雲がなびき、はるか富士の山影が星明かりに照らされて……。まさに至福のときは、このこと

を指すのだろう。

「撮影中は長時間露光の時間を計ったり、星空を眺めたりして、無心に近い精神状態かもしれない。ただ、シャッターを切るたびに、自分が癒されていく気はしますね。夜明けまでの数時間、このすばらしい光景を独り占めできる！これは何ものにも代えがたい喜びです」

昼間の喧騒とはまるっきり無縁の、極上の時間が無限に広がっていく。なんと贅沢な、贅沢すぎる愉しみ。少し、いや、だいぶ羨ましく思えてきた。ちよつと意地の悪い質問とは感じつつ、「万が一、富士山がなくなったらどうします？」と、たずねてみた。

「……………」。絵

に描いたような絶句だった。もともと寡黙な竹村さんが、さらに黙り込み、考

え込んでしまった。すみません、そんなつもりでは……。と同時に、あることに気づかされた。

もしかしたら、そうなのだ。おそらく、星明かりや月明かりという薄化粧を施した富士山に、恋をしてしまったのではないか。かつて、富士をとらえ続けた写真家・岡田紅陽が「富士子」と女性に譬えたように、竹村さんもその虜になった……。

だからこそ竹村さんの作品は、掌ですくい取れるような濃密な空気感と美しい色彩に溢れているのだろう。「まだまだ、いろんな場所から夜景富士、星景富士をとらえてみたいですね」。天空の逢瀬は、これからも続く。

（文・金子嘉伸）

## 夜明けまでの数時間、 天空の富士山を独り占め。 星空の下での逢瀬は続く……。



竹村幸和(たけむら・ゆきかず)

高知県生まれ。学生時代に日本各地を走る蒸気機関車を撮りはじめる。そうした中で、夜の駅舎などに魅了され、独特の色彩描写に惹き込まれる。現在はホームページ（HP）を中心に、地道な作家活動を続けている。同HPには、夜景富士の撮り方のエッセンスなども掲載。神奈川県在住。<http://www.yukifuji.com>（撮影/桃井一至）



ペンタックス67IIとキヤノンEOS 5Dが竹村さんの“絵筆”だ。5Dは原則、初期設定のまま。PCで画像をいじるのも最小限とか。

近  
所  
論

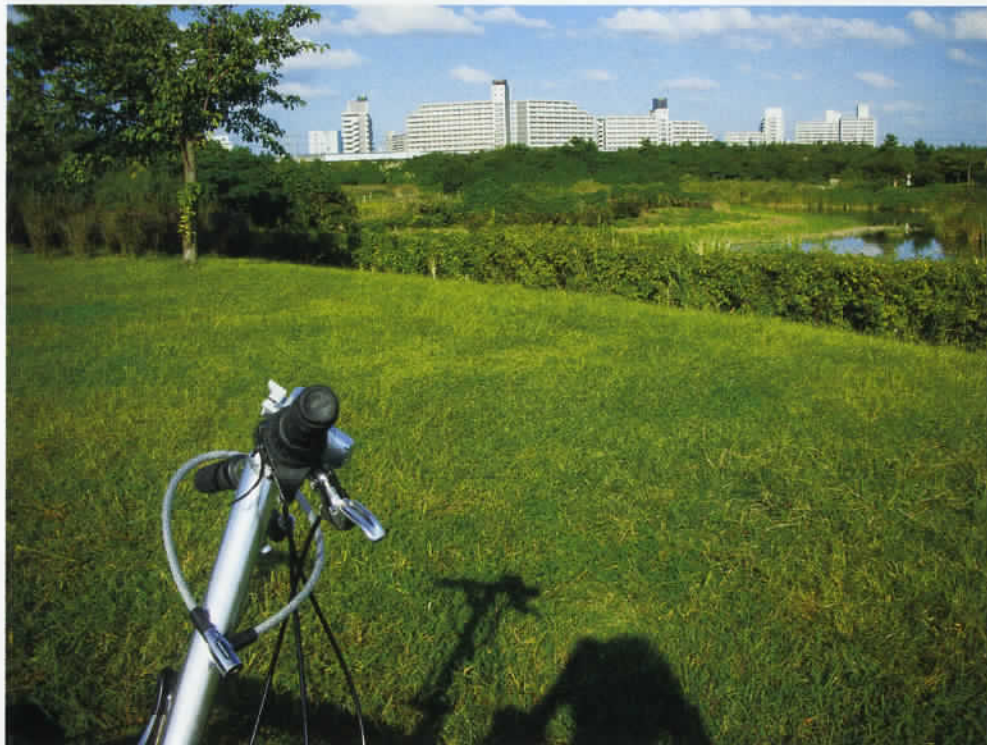
(そこにある季節)

大  
西  
み  
つ  
ぐ

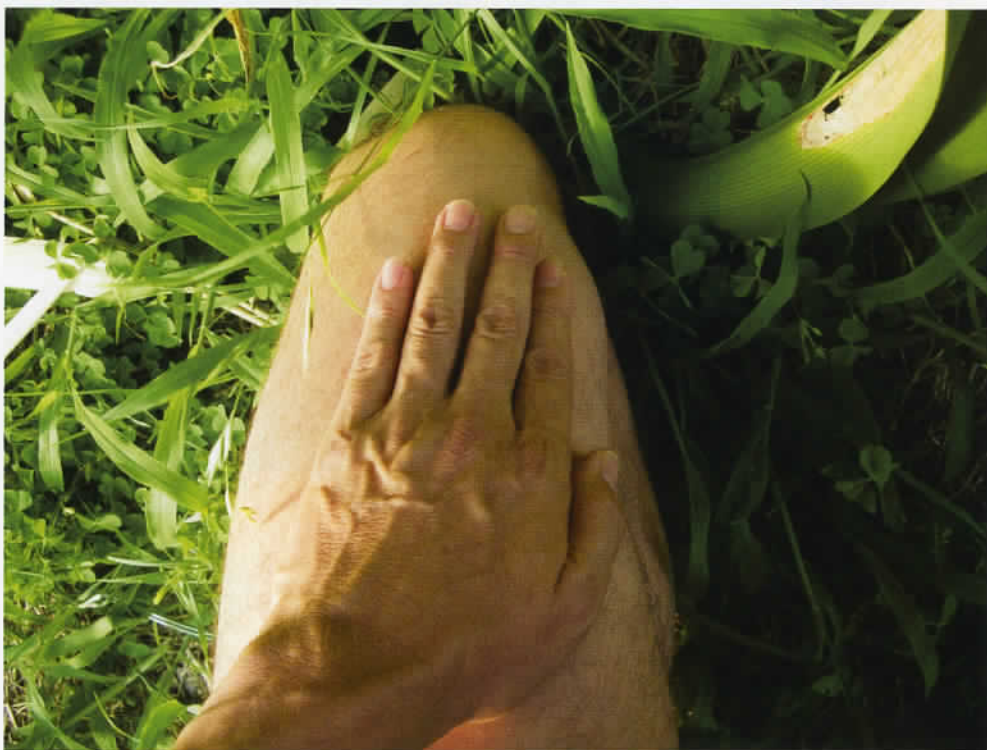
*Mitsugu Ohnishi*







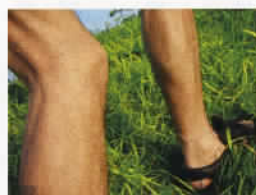
自転車を駆って、今日も「ニューコースト」を巡る。  
埋立地は長い年月で変貌を遂げ、心にこの風景がなじんできた。



ムツとする草いきれ。夏休みの感覚。草むらに鼻をつけて転がりたい衝動に駆られる。  
感じて、触れて、撮る、街の肌ざわり。



花見やほうずき市、菊まつりなど、ささやかな季節のセレモニーが下町にはあるが、季節が変わるダイナミズムは感じにくかった。折を見てニューコーストを巡るようになった今では、目を置かずとも季節が細かく移り変わっていくことがわかる。



気軽にノーファインダーで撮れるデジタルカメラは、偶然性が増幅されて、おもしろさも増す。



植物や虫の姿を撮る。虫の死なんて、今まで見えにくかった。レンズを向けるようになったのは、年齢を重ねたためかもしれない。



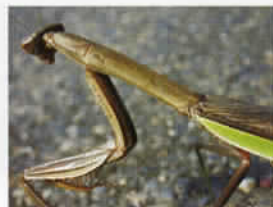
適足の小学生たちがはしゃぎながら通り過ぎていく。トンボはうるさいまでに私の周りを飛んでいる。陽気な日差しがうれしい。

## かけがえのない風景になりつつある 「トウキョウ・ニューコースト」。

「近所論」とは、まさに家の近くを撮ること。近所について語ることがあってもいいんじゃないか、という気持ちがあったので、始めたことなんです。「論」と付けたのは、まあ腰を据えて取り組んでいることの決意表明みたいなもの。20年前、1987年に江戸川区へ引っ越してきてから、葛西臨海公園を中心に、近所を撮りはじめました。東京・深川で生まれた私は、いわゆる下町の雰囲気の中で育ったんです。そして、そういう風景を撮ってきましたし、そこに居心地のよさもありました。

転居してきたころは、「湾岸（ベイ）エリア」と呼ばれ、開園4年目に入った東京ディズニーランドに象徴される、まさに人工的に造られた場所という印象でした。下町的なものとは異なる雰囲気、埋立地でバーベキューをして楽しむ家族らに違和感を覚えたのも事実です。半ば揶揄の意も込めて、一带を「ニューコースト」と私は名づけました。

それが、20年も撮り続けていると、木々もそれなりに成長したりして、ニューコーストの風景が



しばしカマギリと遊ぶ。デジタルカメラを持つてのぞき込む私は、彼にとってうさくさい存在だったろう。



漠然と時間が過ぎていく。特別な何かを撮るわけでもない。ささやかな季節の到来を確かめるだけ。

豊かになってきた。なんというか……この風景の中で20年生きてきた実感があるんです。ここ抜きでは語れない、自分のかけがえのない風景になりつつある、と感じています。

この間、カメラも発達しました。当初はマキナ670（フィルムの中判カメラ）で撮っていましたが、94年ごろからデジカメを持つようになりました。その後のデジカメの性能アップはさまざま、それに合わせてレンズを向ける対象も幅広くなってきたんです。

たとえば、虫や葉っぱ。昔はあまり関心がなかったのですが、デジカメの液晶を見ながら撮っていると、手のひらで、こう、捕獲しているような、慈しんでいるような感じになる。これは、フィルムカメラにはなかった感触で新鮮だったし、撮っていて楽しいですね。

季節は、夏が好き。秋口になると、空気のおいが変わってしまう。その時期に虫をしつこく撮ったのは、過ぎ去ってしまう夏を引き留めたい、そんな気持ちだったんです。

「近所論」にちよつと付け加えます。仮に、プライベートな写真を「近景」として、物理的に遠く離れた国の写真や心理的に距離のある戦争などの写真を「遠景」として位置づけるとすると、社会性も乏しくて近景でしかなかったものが、50年、100年の後には記録としての価値をもち、やがて「中景」と呼べるものへと変化していくのではないかと考えています。そうなりうる、なつてほしいというメッセージも、「近所論」には込められているです。(談)



大西 みつぐ(おおにし みつぐ)

1952年東京生まれ。「河口の町」で第22回太陽賞、「遠い夏」ほかで第18回木村伊兵衛写真賞受賞。写真集・著書に「遠い夏」(ワイズ出版)、『デジカメ時代のスナップショット写真術』(平凡社新書)ほか多数ある。東京総合写真専門学校講師、武蔵野美術大学非常勤講師。

